

「おかしい感じやう」の心理学

——「心象スケッチ」における賢治の超常体験の特徴

浜垣 誠司

一、心象スケッチ・異空間・超常体験

① 「思索メモ1」から見える異空間

十、十界を否定し得ざることを

一、異空間の存在 天と餓鬼

感覺幻想及夢と実在

二、菩薩佛並に諸他八界依正の存在

内省による及実行による証明

(「思索メモ1」より)

▼ 賢治の言う「異空間」とは、仏教の教理における「十界」(仏、菩薩、声聞、縁覚、天、人、

修羅、畜生、餓鬼、地獄)のうち、この世以外の「八界」を指していると思われる

▼ それらの異空間の様子は、幻想や夢によって示されると彼は考えていた

■ ここで言う「幻想」とは、幻覚や自生的・非現実的な表象Ⅱ一般に言う超常体験のことか

▼ そのようにして示される異空間の例が、「天と餓鬼」と思われる

すきとほるものが一列わたくしのあとからくる

ひかり かすれ またうたふやうに小さな胸を張り

またほのぼのとかゞやいてわらふ

みんなすあしのこともらだ

ちらちら瓔珞もゆれてあるし

めいめい遠くのうたのひとくさりづつ

緑金寂靜のほのほをたもち

これらはあるひは天の鼓手、緊那羅のこともら

(「小岩井農場」より)

餓鬼との出会い

宮沢さんは学校の農業実習が終ると、実習服のままの姿で、いつもの心象スケッチ集をポケットに入れて出て行く。どこに行くというあてもなく気のむくまま、足のすすむままに歩いていく。実習の疲れも忘れ、きのは田圃のほとり、今日は野原というように思索の頭を下げながら静かに歩いていく姿が思い出される。

そして夕刻に学校に帰って来る。私はこのようなとき、いつもどこに行って来ましたかとたずねると、きようは学校から程近い北万丁目付近の田圃を歩いて来ましたという。今日はどんなことをスケッチして来ましたかと聞くと次のようなことを話された。

田圃の畦道の一隅に大きな石塊が置かれてあるので不思議に思いました。畦の一隅に何故このような石が一つだけ置かれてあるかと疑い、この石には何んの文字も刻まれていないからその理由はわからない、何んの理由なしに自然に石塊一つだけある筈はない。これには何かの目じるしに置かれたに相違ないと考えた。その昔、この辺一帯が野原であったころ人畜類を埋葬したときの目じるしに置いたものに相違ない。また石の代りに松や杉を植えてある場所もある。こういうことを考えながらこの石塊の前に立って経を読み、跪座して瞑想にふけると、その石塊の下から微かな呻き声が聞えてくるのです。この声は仏教という餓鬼の声である。なお耳を澄ましていると、次第に凄じい声になってきました。それは食物の争奪の叫びごえであったと語った。

宮沢さんに「ガキ」の世界というものは私どもの感覚によって、とらえられる世界でありますかと問うた。宮沢さんはそれはできます、と答えた。この問題についてしばらく論じ合ったことがあった。宮沢さんは高僧伝の中から餓鬼に関しての実話を引証して話された。

(白藤慈秀『こぼれ話宮沢賢治』より)

▼賢治にとって、幻覚や夢による異空間との交信は、「あちらからこちらへ」だけではなく、双方向的だった

にはかに呼吸がとまり脈がうたなくなり
それからわたくしがはしつて行つたとき
あのきれいな眼が

なにかを索めるやうに空しくうごいてゐた
それはもうわたくしたちの空間を二度と見なかつた
それからあとであいつはなにを感じたらう

それはまだおれたちの世界の幻視をみ
おれたちのせかいの幻聴をきいたらう

〔中略〕

ほんたうにその夢の中のひとくきりは

かん護とかなしみとにつかれて睡つてゐた

おしげ子たちのあけがたのなかに

ほんやりとしてはいつてきた

《黄いろな花こ おらもとるべがな》

たしかにとし子はあのあけがたは

まだこの世かいのゆめのなかにゐて

落葉の風につみかさねられた

野はらをひとりあるきながら

ほかのひとのこのやうにつぶやいてゐたのだ

〔青森挽歌〕より〕

■ 右記で、死んだトシはすでに異空間にいるわけだが、向こうからも「おれたちの世界」のことを、幻視や幻聴によって見聞きできると想像されている

■ またその夜、トシは異空間から、この世のシゲの夢に出てきた

②賢治の書簡における「心象スケッチ」の説明

前に私の自費で出した「春と修羅」も、亦それからあと只今まで書き付けてあるものも、これらはみんな到底詩ではありません。私がこれから、何とかして完成したいと思つて居ります、或る心理学的な仕事の仕度に、正統な勉強の許されぬ間、境遇の許す限り、機会のある度毎に、いろいろな条件の下で書き取つて置く、ほんの粗硬な心象のスケッチでしかありません。

〔森佐一あて書簡200より〕

わたくしは岩手県の農学校の教師をして居りますが六七年前から歴史やその論料、われわれの感ずるそのほかの空間といふやうな事についてどうもおかしな感じがやうがしてたまりませんでした。わたくしはさう云ふ方の勉強もせずまた風だの桶だのにとかくまぎれ勝ちでしたから、わたくしはあとで勉強するときの仕度にとそれぞれの心もちをそのとほり科学的に記載して置きました。その一部分をわたくしは柄にもなく昨年春の春本にしたのです。心象スケッチ春と修羅とか何とか題して関根といふ店から自費で出しました

〔岩波茂雄あて書簡214aより〕

▼岩波あて書簡にある「そのほかの空間」とは、「思索メモ1」に言う「異空間」のことであり、「おかしな感じがやう」とは、「幻想（＝幻覚等）」すなわち超常体験のことと思われる

▼すなわちここに、「異空間」↓「幻想」↓「心象スケッチ」↓「心理学的な仕事」という、賢治の企画が示されている

③ 本日の発表でお話ししたいこと

▼ 賢治が「おかしな感じやう」と呼び、「心理学的な仕事」の題材にしようと「心象スケッチ」に記録した種々の超常体験は、現在の心理学・精神医学から見ると、いったい何なのか？

▼ そのような体験の基盤にある賢治独特の心性は、彼の世界観・倫理観にどのように影響を及ぼしたか？

二、賢治の超常体験の背景にある心理メカニズムⅡ「解離 (dissociation)」

① まず前提として、「心象スケッチ」の記述は、賢治の実体験なのか？

▼ 賢治自身は、「そのとほりの心象スケッチです」「たしかに記録されたこれらのけしきは／記録されたそのとほりのこのけしきで：」「それぞれの心もちをそのとほり科学的に記載」などと書いている

▼ 多種多様な超常体験が記録されているが、その大半は、ある特定の精神疾患（解離性障害）において見られる症状パターンに、きれいに当てはまる

（恣意的な「創作」であれば、偶然にその大半が特定の疾患に合致するとは考えにくい）

② 柴山雅俊著『解離性障害』（ちくま新書、二〇〇七）

▼ その第七章において宮沢賢治が取り上げられ、彼の作品に見られる超常体験の記述が、いずれも解離症状として理解できることが説明されている

- 表象幻視
- 離人症
- 気配過敏
- 体外離脱体験
- 入眠時幻覚

▼ 柴山氏は、賢治が「解離性障害」という病名を付けるべき病的な状態にあったとは考えないが、彼が解離を呈しやすい傾向を持っていたと想定すると、その作品世界を読み解く上で新たな視点が得られると指摘

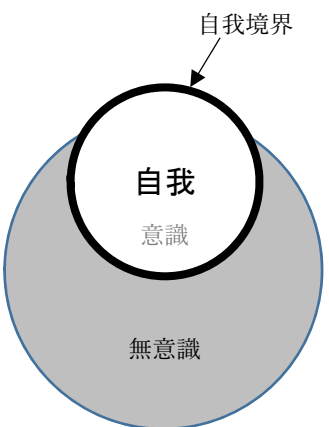
- 一般に、解離を呈しやすい傾向（解離傾性 dissociativity）は、健常者から高度に病的な状態の人に至るまで、全ての人が一定程度は持っていると考えられる（後述）

③ 「解離」とは何か？

▼ ごく簡単に言えば…

「自我を包む膜（自我境界 ego-boundary）」が、何らかの変容をしてしまった状態」

- 通常は、自我境界は外界と内界（無意識）に接しており、双方からの一定の独立性の維持と、情報の取り入れに関わる
- 自我境界のおかげで、自我意識の単一性・統一性が保たれている



▼ 種々の解離状態では、自我境界は例えば次のような形で変容する

▪ 稀薄化…「膜」が薄くなってしまったために、外界や内界から過剰な刺激の流入にさらされる

(例えば、外界からは「気配過敏」という形で、内界からは「表象促進」という形で)

特定の相手に対してのみ自我境界が稀薄化する場合には、両者の一体化傾向が生じる

(健全者においても、例えば恋人同士や、母と子の間で)

▪ 拡張…自我が拡大すると、自分が強く大きくなったように感じたり、極端な場合は自我境界が消失して世界全体にまで自我が拡散したりする(大洋感情・溶解体験等)

▪ 収縮(離人症)…自我が収縮して、その境界が肥厚し刺激を通しにくくなると、外界も自己の内界も遠ざかり、現実はずいぶん遠くによそよそしくなり、自分の感情や存在の実感も薄れる

▪ 体外離脱…自分(の魂)が、自分の身体から外に出て、傍らから自分を見ている体験

▪ 区画化…自我の中に新たに別の「膜(壁)」ができてしまうことにより、意識からアクセスできない領域が生じてしまう

(最も多いのは「解離性健忘」で、ショックな体験等の記憶を思い出せなくなる)

(区画化が最も極端に進化した形が、多重人格⇨解離性同一性障害)

※ 「区画化」は最も代表的な解離現象であり、「解離」という語の由来ともなっているが、賢治の作品には認められない

▪ 解離性幻覚…自我境界が収縮し、さらに内界との壁が稀薄化すると、通常は自我意識の内部で生じている言語活動や表象が、あたかも自己の「外部」から到来するように感じる

(賢治の多くの作品における「幻聴」のメカニズムと思われる)

Cf. 賢治の作品にも見られる「入眠時幻覚」は、解離症状そのものではないが、解離傾性が高い人に起こりやすい現象である

三、「心象スケッチ」に現れた解離現象

① 解離性幻聴

こんなやみよのはらのなかをゆくときは

客車のまどはみんな水族館の窓になる

(乾いたでんしんばしらの列が

せはしく遷つてゐるらしい

さしやは銀河系の玲瓏レンズ

巨きな水素のりんごのなかをかけてゐる)

りんごのなかをはしつてゐる

〔中略〕

あやしいよるの 陽炎と

さびしい心意の明滅にまぎれ

水いろの川の水いろ 駅

(おそろしいあの水いろの空虚なのだ)

汽車の逆行は希求の同時な相反性

こんなさびしい幻想から

わたくしははやく浮びあがらなければならぬ

(「青森挽歌」より)

▼ 右記で、字下げのない「地の文の話者」と、字下げされた(一重括弧の話者)とは、自然な対話を交わしている(「りんご」や「水いろ」のモチーフを交換)

▼ 「地の文」が、作者の主體的自我の発話であるとすれば、(一重括弧の文)は、自我意識内の「内言」を表していると考えられ、これは幻聴ではない

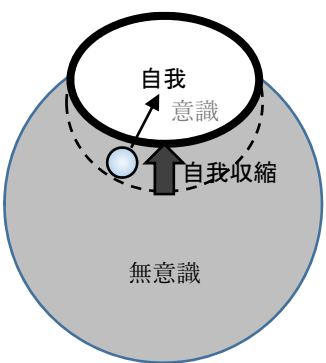
今日のひるすぎなら
 けはしく光る雲のしたで
 まつたくおれたちはあの重い赤い赤いボムプを
 ばかのやうに引つばつたりついたりした
 おれはその黄いろな服を着た隊長だ
 だから睡いのはしかたない
 (おいおまへ せわしいみちづれよ
 アイレドホニヒト ステルレ
 どうかここから急いで去らないでくれ
 《尋常一年生 ドイツの尋常一年生》
 いきなりそんな悪い叫びを
 投げつけるのはいつたいたれだ
 けれども尋常一年生だ
 夜中を過ぎたいまごろに
 こんなにばつちり眼をあくのは
 ドイツの尋常一年生だ)
 あいつはこんなさびしい停車場を
 たつたひとりを通つていつたらうか

(「青森挽歌」より)

▼ 右記で、(一重括弧の話者)にとって《二重括弧》の言葉は、自己の内部ではなく外部から突然に到来しており、(一重括弧)の側ではそれが誰の発語なのかわかっていない(「いきなり:」「投げつけるのはいつたいたれだ」)
 すなわち、この言葉は(一重括弧の話者)にとって、「幻聴」として出現したと考えられる

■ 解離性障害においては「自我収縮」のために、通常は自我の内部で行われている精神活動が外に取り残され、自我の外部の現象として、他性を帯びて体験されることがある↓「解離性幻聴」「解離性幻視」の出現

▼ 一方、右記で《二重括弧》は、(一重括弧)の中に「入れ子」になっている
 すなわち、この幻聴を聞いているのは、「地の文の話者」ではなくて、直接的には(一重括弧の話者)と考えられる



■ 表層の「地の文」主體的自我」と、かなり深層に位置する《二重括弧》とは、当初は相当に隔たっており、その中間の(一重括弧)が、両者を仲介する位置にある

▼ しかしこのような関係は、「青森挽歌」の後半になると変化する

《もひとつきかせてあげやう
 ね じつさいね
 あのとときの眼は白かつたよ
 すぐ瞑りかねてゐたよ》
 まだいつてゐるのか
 もうぢきよるはあけるのに
 すべてあるがごとくにあり
 かゞやくごとくにかがやくもの
 おまへの武器やあらゆるものは
 おまへにくらくおそろしく
 まことはたのしくあかるいのだ

(「青森挽歌」より)

《みんなむかしからのきやうだいなだから
けつしてひとりをいのつてはいけない》

ああ わたくしはけつしてさうしませんでした
あいつがなくなつてからあとのよるひる
わたくしはただの一どたりと
あいつだけがいいとこに行けばいいと
さういのりはしなかつたとおもひます

〔青森挽歌〕より〕

▽ これらの箇所では、「地の文の話者」と《二重括弧の話者》⇨幻聴は、直接に対話をして
いる。

▪ すなわちここでは、主体的な自我意識が、自己の中より深い部分に、直接アクセスできるように
なっていると言える

② 解離性幻視（表象幻視と外界出現型幻視）

▽ 「表象 (representation)」とは、意識的・無意識的に心の中に思い描かれる、様々な想像
的イメージのことであり、通常は自覚的に、それが現実の存在ではなく自らの心の中
の現象であることがわかっている

▽ 一方、「幻覚 (hallucination)」は、本人にとってほまるで「知覚 (perception)」と同じ
状態で外部から現れてくるため、本人はそれが現実の出来事であると受け取ってしまう
場合が多いが、自分の幻覚であることが最初からわかっている場合もある（一般に解離性
幻覚は、自分でも幻覚とわかっていることが多い）

▽ 解離状態では、自我収縮のために「表象」と「幻覚」の境界が曖昧になり、両者の中間
的な現象として、「表象と同じく外界に定位はされないが、幻視と同じくありありと現実
性を伴って見える」という体験が生じうる ↓これが「表象幻視」

すきとほつてゆれてゐるのは

さつきの剽悍な四本のさくら

わたくしはそれを知つてゐるけれども

眼にははつきり見てゐない

たしかにわたくしの感官の外で

つめたい雨がそそいでゐる

（天の微光にさだめなく

うかべる石をわがふめば

おゝユリア しづくはいとど降りまさり

カシオペーアはめぐり行く

ユリアがわたくしの左を行く

大きな紺いろの瞳をりんと張つて

ユリアがわたくしの左を行く

ペムベルがわたくしの右にゐる

.....はさつき横へ外れた

あのから松の列のどこから横へ外れた

《幻想が向ふから迫つてくるときは

もうにんげんの壊れるときだ》

わたくしははつきり眼をあいてあるいてゐるのだ

ユリア、ペムベル、わたくしの遠いともだちよ

わたくしはずあぶんしばらくぶりで

きみたちの巨きなまつ白なすあしを見た

〔小岩井農場〕パート九より〕

- ▼ この箇所、賢治は「四本の剽悍なさくら」を眼では見ていないが、「すきとほつてゆれてゐる」状態にあることを、視覚的に感じているようである（＝表象幻視）
- ▼ 一方、「……………」と伏せ字にされている存在が「あのから松の列のどこから横へ外れた」様子は、賢治にとって外界に定位されて見えているようである（＝外界出現型幻視）

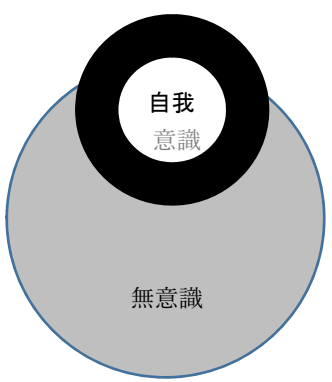
③ 表象促迫 (forced representation)

- ▼ 「幻想が向ふから迫ってくる」というのは、自分の意に反して現れる「自生的」な表象が、勝手にどんどん心の中にあふれ出てきている状態と思われる＝「表象促迫」

④ 離人症

- ▼ 「離人 (depersonalization)」とは、自分自身の感情、思考、感覚、身体、行為等に対する実感がなくなり、自分自身に対してよそよそしい傍観者のような感覚を覚えてしまう状態で、しばしば自己の外部の存在に対しても現実感がなくなってしまう「現実感消失 (derealization)」を伴う

- 「自分が存在すると感じられない」「自分が行動していても、自分がしていると感じられない」「自分の手足が自分のものと感じられない」「自分の身体がなくなってしまったように感ずる」「周囲の世界がベールを通して見るように現実感がない」
- 自我が収縮するとともに、自我境界が分厚く
なつて周囲の刺激を通してにくくなっている状態と想定される



ぼんやりと脳もからだも
うす白く
消え行くことの近くあるらし。

(歌稿 [B] 165)

われはなし。われはなし。われはなし。われはなし。すべてはわれにして、われと云はるゝものにしてわれにはあらず総ておのおのなり。われはあきらかなる手足を有るごとし。いな。たしかにわれは手足をもてり。さまざまの速なる現象去来す。この舞台をわれと名づくるものは名づけよ。名づけられたるが故にはじめの様は異ならず。

(保阪嘉内あつ書簡 154 より)

⑤ 体外離脱体験

- ▼ 「体外離脱体験 (out-of-body experience)」は、魂が身体から抜け出して、自分自身を外から眺めているような体験のことで、強い外傷体験の際などに起こることがある
- ▼ 柴山雅俊氏は、次の二例を一種の体外離脱と考えている

そのとき私は大へんひどく疲れてゐてたしか風と草穂との底に倒れてゐたのだとおもひます。
その秋風の昏倒の中で私は私の錫いろの影法師にずるぶん馬鹿ていねいな別れの挨拶をやつてゐました。

(「インドラの網」より)

石丸さんが死にました。あの人は先生のうちでは一番すきな人でした。ある日の午后私は椅子に
よりました。ふと心が高い方へ行きました。錫色の虚空のなかに巨きな巨きな人が横はつていま
す。その人のからだは親切と静な愛とできてみました。私は非常にきもちがよく眼をひらいて
考へて見ましたが寝てみた人は誰かどうもわかりませんでした。次の日の新聞に石丸さんが死
んだと書いてありました。
(保阪嘉内あて書簡「53」より)

▼ 次の例は、自我が収縮するとともに、遙か上空へと体外離脱しているように思える

憤懣はいま疾にかはり
わたくしはたよりなく騰つて
河谷のそらに横はる
しかも
水素よりも軽いので
ひかつてはてなく青く
雨に生れることのできないのは
何といふいらだゝしさだ

(「囃語」)

▼ 次の例では、自我は体内に留まっているが、その一部が外に流出している

そら、ね、ごらん
むかふに霧にぬれてゐる
蕈のかたちのちいさな林があるだらう
あすこのとこへ
わたしのかんがへが
ずぶんはやく流れて行つて
みんな
溶け込んでゐるのだよ
こゝいらはふきの花でいつばいだ

(「林と思想」)

⑥ 入眠時幻覚 (hypnagogic / hypnopompic hallucination)

▼ 健常者も、入眠時や出眠時の朦朧とした意識下では、様々な幻覚を体験することがある
(金縛り体験、誰かに名前を呼ばれる、室内に誰かの姿が見える、等)

▼ これらは、解離性障害に限定された症状ではないため解離症状には分類されないが、特
に解離性障害の患者には、一般人よりも出現する頻度が高い

寒さとねむさ
もう月はたゞの砕けた貝ぼたんだ
さあ ねむらうねむらう
……めさめることもあらうし
そのまゝ死ぬこともあらう……
誰かまはりがあるいてゐるな
誰かまはりをごくひっそりとあるいてゐるな

〔中略〕

その黒い転石の上に
うす緒いころもをつけて
裸脚四つをそろへて立つひと
なぜ上半身がわたくしの眼に見えないのか
まるで半分雲をかぶった鶏頭山のやうだ

(「河原の坊(山脚の黎明)」より)

もうわたくしを過ぎてゐる
あゝ見える
二人のはだしの遅ましい若い坊さんだ
黒の衣の袖を上げ
黄金で唐草模様をつけた
神輿を一本の棒にぶらさげて
川下の方へかるがるかっついで行く
誰かを送った帰りだな
声が山谷にこだまして
いまや私はやつと自由になつて
眼をひらく

〔河原の坊（山脚の黎明）〕より

⑦ 世界との合一体験

海の縞のやうに幾層ながれる山稜と
しづかにしづかにふくらみ沈む天末線
あゝ何もかももうみんな透明だ
雲が風と水と虚空と光と核の塵とでなりたつときに
風も水も地殻もまたわたくしもそれとひとしく組成され
じつにわたくしは水や風やそれらの核の一部分で
それをわたくしが感ずることは水や光や風ぜんたいがわたくしなのだ

〔種山ヶ原〕下書稿（二）より

▼ 自我が限りなく拡張し、自我境界が稀薄化の果てに消失した時、自我と全世界が溶け合
つて一体化しているという感覚が生ずる

▼ このような神秘的な体験は、古今東西において様々な形で描写され、しばしば「神との
一体化」などとして宗教的に位置づけられてきた

ブラフマン（梵）は一切宇宙にしてこのアートマン（我）である。

〔マインドウキヤ・ウバニシャッド〕より

古代ギリシアの自然神秘主義は、ディオニソス神がヘラスの民に教えた「脱自（エクスタシス）」及び「神充（エントゥシアスマス）」の体験に基く一の特異なる宇宙的霊覚の現成である。エクスタシス *ekstasis* とは文字通り「外に立ち出ること」即ち通常の状態に於ては肉体と固く結合し、いわば肉体の内部に幽閉され、物質性の原理に緊縛されて本来の霊性を忘逸している靈魂が、一時的に肉体を離脱し、感性的事物の塵雜を絶せる純靈的虚空に出で、かくて豁然として秘妙の霊性に覚醒することを意味する。然して、かくの如く感性的生成界の一切を離却し、質料性の纏縛を一举に截断しつつ「外に出」た靈魂はもはや旧き人間的自我ではあり得ない。人間的自我が自性を越え、最早いかなる意味に於ても自我と名付けられぬ絶対的他者の境位に棄揚されることがエクスタシスの端的である。言い換えればエクスタシスとは人間的自我が我性に死に切ること、自我が完全に無視されること、自我が一埃も残さず湮滅することを意味する。併し意識の主体としての自我が有ますところなく湮滅し去れば、その意識の内容として今まで自我の対象をなしていた感性的世界もまた自ら掃蕩されて遺影なきに至るは当然であろう。かくてエクスタシスに於て、人間の自然的相対意識は遺漏なく消融し、内外共に一切の差別対立を絶して蹤跡なく、ただ渾然として言慮の及ぶことなき沈黙の秘境が現証されるのである。この自我意識消滅の肯定的積極的側面をエントゥシアスマス *enthousiasmos*（神に充たされ、神に充滿すること）という。

（井筒俊彦『神秘哲学 ギリシアの部』より）

重重帝網なるを即身と名づくとは、是れ則ち譬喩を挙げて、以て諸尊の刹塵の三密円融無礙なることを明す。帝網とは因陀羅珠網なり、謂く身とは我身、仏身、衆生身、是れを身と名づく。また四種の身あり、言く自性、受用、変化、等流、是れを名づけて身といふ。また三種あり、字、印、形、是れなり。是の如く等の身は縦横重重にして、鏡中の影像と灯光の渉入との如し、彼の身即ち是れ此の身、此の身即ち是れ彼の身、仏身即ち是れ衆生の身、衆生の身即ち是れ仏身なり。不同にして同なり、不異にして異なり。
(空海『即身成仏義』より)

私が彼〔引用者注…ロマン・ロラン〕に、宗教は錯覚だと論じた小著を送ったところ、彼は、宗教に関するあなたの判断には全面的に納得するが、あなたが宗教性の本来の源泉を適切に評価していらつしやらないのは残念だ、とする返信を寄こした。いわく、この源泉は、自分の思いをけつて去ることのない特別な感情であり、自分の知る範囲でも、他の多くの人々が同様の感情を持つと述べている。おそらく幾百万の人々にその感情があると決めてかかってよいのはいか。これは、自分が「永遠性」の感覚と名づけた感情であり、何か無窮のもの、広大無辺のもの、いわば「大洋的」という感情なのだ。この感情は純粹に主観的な事実であり、教義などではない。

〔中略…この感情について考察するため、乳児期からの自我の発達過程を述べた後に〕

このようにして自我は、自分を外界から引き離すわけである。もつと正確に言うなら、もともと自我はすべてを含んでいるのだが、後に外界を自分から排出する。つまり、われわれの今日の自我感情とは、かつての自我と環境とが密接に繋がっていたのに対応して、今よりも遙かに包括的であった感情、のみならず一切を包括していた感情が萎えしぼんだあとの残余にすぎない。仮にこうした本源的な自我感情が多くの人々の心の生活において―規模の大小はあれ―なお存続していると想定してよいなら、この自我感情は、もつと細く鋭い境界線で区切られた成熟期の自我感情とは、一種の割符のように対をなして並び立つことだろう。また、こうした自我感情にふさわしい表象内容といえは、まさに私の友人が「大洋」感情を説明するのに用いたのと同じ、無窮、あるいは万物との一体感といった表象内容であろう。

(S・フロイト『文化の中の居心地悪さ』より)

溶解体験

では、生命の高揚あるいは緊張の原初体験はどこに見いだされるのか。それは対象中心的(alloentric)活動である。自己は対象の中に没入し、対象は自己の中に浸透する。自己と対象は1つの全体の中で融合している。自己と外界とのあいだに境界は存在しない。この無境界は「意識に直接与えられた(ベルクソン)」リアリティである。〔中略〕

ハシシユで陶酔状態に陥っていた時のことを、ボードレルは次のように述べている。「人格は消え失せ、汎神論的詩人がうたいあげた世界が眼の前に繰り広げられる。そして実際異常なことに、外界の物を見ているうちに自己の存在感は消え失せてしまい、自己はその世界の中に溶け込んでいく。目が、風で心地よげに揺れている木の上に吸いよせられると、詩人の頭脳の中では全く直喩でしかなかったものが、たちまち1つの現実となって現れる。樹のうちに私の熱情、あこがれ、悲哀が甦える。その溜息とさざめきは私のものとなり、私は樹そのものとなる。」

(作田啓一『生成の社会学をめざして』より)

▼このように、「自我と全世界が一体化し溶け合う」状態を、賢治は実際にしばしば体験していたと思われる

■「ちいさな自分を劃ることのできない／この不可思議な大きな心象宇宙のなかで…」

▼「全世界」とまでいかなくても、自己が周囲と一体化し、彼我を隔てる境界線を意識しない状態は、彼にとってかなり基本的な日常感覚だったのではないか

※「現実検討 (reality-testing)」の保持

▼賢治は、以上のような様々な超常的・非現実的体験をしながらも、何が現実で何が現実でないかという客観的な認識は持ち続けていた

- 《あんまりひどい幻想だ》《幻想が向ふから迫ってくるときは／もうにんげんの壊れるときだ》
- 作品タイトルにも、「幻聴」「囁語」
- ▽ 賢治がその頻繁な異常体験にもかかわらず、病的状態には至らず健康な範囲内の精神状態を保ち続けていたことが、ここに表れている

四、賢治の生得的な解離傾性の高さ

① 「解離傾性」という概念

- ▽ 誰しも、時には気分が高揚して異様なほど生き生きとした周囲との一体感を感じたり、逆に疲れた時などには自分の感情や周囲の物事に現実感がなかったりすることもある
 - すなわち誰でも多少は解離的な自我境界の変容を体験することはある(解離スペクトラム)
- ▽ 人によって、そのような体験の頻度や程度の強さは生得的に異なるが、解離現象を呈する傾向が強いことを、「解離傾性 (dissociativity) が高い」と言う
- ▽ 種々の実験によって、「解離傾性の高さ」は、「催眠感受性 (hypnotizability) の高さ」と、強く相関することがわかっている
 - 自我境界が薄い＝周囲からの暗示や影響を敏感に受けやすい

② 賢治の催眠感受性の高さ：「静座法」をめぐるエピソード(一九二二年一月)

又今夜佐々木電眼氏をとひ明日より一円を出して静座法指導の約束を得て帰り申し候 佐々木氏は島津(ママ)大等師あたりとも交際致しずいぶん確実なる人物にて候。静座と称するもの、極妙は仏教の最後の目的とも一致するものなりと説かれ小生も聞き囁り読みかじりの仏教を以て大に横やりを入れ申し候へどもいかにも真理なるやう存じ申し候。(御笑ひ下さるな)もし今日実見候やうの静座を小生が今度の冬休み迄になし得るやうになり候はゞ必ずや皆様を益する一円二円のことにてはこれなしと存じ候 小生の筋骨もし鉄よりも堅く疾病もなく煩悶もなく候はゞ下手くさく体操などをするよりよっぽどの親孝行と存じ申し候

(宮沢政次郎あて書簡より)

謹啓 昨日の手紙の通り本日電眼氏の指導の下に静座仕り候ところ四十分にて全身の筋肉の自動的活動を来し今後二ヶ月もたゞば充分卒業冬休みに御指導申す決して難事ならずと存じ候まづは御報知まで 草々 敬具

(宮沢政次郎あて書簡)

静座法の佐々木電眼という人は中学校寄宿舎附近に住居して、独特の方法で静座法を教えた人で、島地氏や色々の人々とも昵懇であったようである。眼光炯々とした、あまり背の高くない精力的な一種の催眠術師であったと私は思っている。

賢治は前の手紙とこの葉書にも書いたようにこの佐々木氏の指導で静座法を何か月か習った。そして冬休みにこの人を連れて家に帰ったが、父や姉にも静座法をすすめたことを私は思い出すのである。

電眼の暗示に誘導されて、姉のとは見るまに催眠状態になったが、父は電眼が長い時間汗を流して懸命に努力したのであったが、いつまで経っても平気で笑っていたので、遂に電眼はあきらめて、雑煮餅を十数杯平らげて、山猫博士のように退散したのであった。

(宮沢清六「十一月三日の手紙」より…『兄のトランク』所収)

- ▽ すなわち、賢治はこの「静座法」によって、「四十分にて全身の筋肉の自動的活動を来し」という状態になった(花巻の自宅では、トシも催眠状態になった)
- ▽ この「静座法」は、「岡田式静座法」(あるいはその一派)と推測される

- 「岡田式静座法」は、岡田虎二郎が一九〇四年に創始し、一九二〇年に急死するまで全国的に一大流行した健康法の一種で、最盛期には東京の百数十か所に道場が開かれて多くの有名人も参加し、会員数は二万人に達した

▼ 「岡田式静座法」の際立った特徴は、この方式で静座をしているうちにかなりの人が、賢治も述べているような「自動的活動」⇨意志とは関係ない身体の動き（動揺）を始めてしまうということにある

▲動揺の種々

此の身体の動揺には、色々種類がある。手を動かす人もあれば、頭を動かす人もある。肩を動かす人もあれば、腰を動かす人もある。頭の運動にも、或は前後に或は左右に、種々の運動がある。手の運動にも、その通りで、縦に振るものもあれば、横に振るものもあるが、握り合せた儘の両の手で、下腹をポンポンと打つのが、最も普通の形である。或は端座の儘で、にじり廻る人もあれば、ビヨンビヨンと飛び廻る人もある。懸け聲を懸けて叫ぶ人もあれば、又妙な聲を出して唸る人もある。其れも三十分なり一時間の間、同じ運動を反復する人もあれば、運動を種々様々に變更する人もある。忽ち静かに、忽ち騒がしく、いまは石地蔵の如く、次には夜叉の如く、千態萬状の動揺を演ずるは、是れ實に静坐會の實況である。

（岸本能武太『岡田式静坐三年』より）

▼ この「意志とは関係のない身体の動き」は、医学的には「心理自動症（psychomotor automatism）」に相当すると考えられる

■ 心理自動症は、意識障害は伴わない軽度の催眠状態（「自動筆記」「お筆先」「コックリさん」等）一般人は「岡田式静座法」によって、どの程度「心理自動症」を呈するのか？

元來、身體の動揺は静坐の目的ではない。静坐中人によつて自然的に伴生する現象である。故に、動揺が起つても、喜嬉するにも當らなければ、又た動揺が起らないからといって、必ずしも心配する必要もない。動揺の起る起らぬは全然意に介しないが可い。

現に親しく岡田氏の指導を受けて、熱心に静坐を行つて居る人々の中にも、身體動揺の現象は、二三日にして起つた人もあれば、既に三年餘も熱心に行つて居ても些しも起らない人もある。故を以て早く動揺の起つた人は早く堂奥に入り、数年後の今日も未だ動揺の起らない人は未だ静坐の堂奥に入つて居ないのかといふと、必ずしも然うではない。二三日にして動揺の現象があつても、未だ堂に入つて居ないものもあれば、三年五年経つても動揺しなくても妙境に達して居るものもある。

（荒井倉三郎『實驗 岡田式静坐法』より）

- すなわち、早い人は修行を始めて「二三日」で起こるが、人によつては「三年余も熱心に行つて居ても些しも起らない」
- すると、初日に「四十分にて全身の筋肉の自動的活動を来し」た賢治は、一般人よりかなり心理自動症を呈しやすい⇨催眠感受性が高い傾向があると言えるだろう
- ▼ すなわち賢治は、「一般人よりも「解離傾性が高かつた」と推定される
- 一般に解離傾性は、生得的に高い人がいるとともに、後天的に外傷体験を受けることによつても高くなることが知られている ↓ 賢治の場合は生得的なものか

▼ 賢治のこの解離傾性の高さ（⇨自我境界の薄さ・柔らかな変形しやすさ）が、彼に様々な「おかしい感じやう」をさせ、「心象スケッチ」の題材を生んだと言える

五、賢治の世界観・倫理観との関連

① 内的心象と外的現実の同一視

▼ 「世界との合一体験」の境地においては、自我⇨世界なのであるから、内的心象と外的現実の区別は消失し、「世界の全ては心象である」ということになる

戦争とか病気とか学校も家も山も雪もみな均しき一心の現象に御座候。その戦争に行きて人を殺すと云ふ事も殺す者も殺さるゝ者も皆等しく法性に御座候。 (宮沢政次郎あて書簡54より)

退学も戦死もなんだ。みんな自分の中の現象ではないか。保阪嘉内もシベリヤもみんな自分ではないか。あゝ至心に帰命し奉る妙法蓮華経。世間皆是虚仮仏只真(保阪嘉内あて書簡54より)

猿ノ足痕ヤ熊ノ足痕ニモ度々御目ニカカリマス。実ハ私モピストルガホシイトモ思ヒマシタ。ケレドモ熊トテモ私ガ創ッタノデスカラソソナニ意地悪ク骨マデ喰フ様ナコトハシマスマイ。(中略)コノ辺ノ山ヤ川ノ工合ナンカハモウアナタニハ夢ノ様ニ思ハレルデセウ。本統ニコノ山ヤ川ハ夢カラウマレ、蓋ロ夢トイフモノガ山ヤ川ナノデセウ。 (工藤又治あて書簡54より)

石丸博士も保阪さんもみな私のなかに明滅する。みんなみんな私の中に事件が起る。

(保阪嘉内あて書簡153より)

「ぼくたちはぼくたちのからだだだって考だつて天の川だつて汽車だつてたゞさう感じてゐるのなんだから、そらごらん、ぼくといっしょにすこしこゝろもちをしづかにしてごらん。いゝか。」そのひとは指を一本あげてしづかにそれをおろしました。するといきなりジョバンニは自分といふものがじぶんの考といふものが、汽車やその学者や天の川やみんないっしょにぼかつと光つてしんとなくなつてぼかつともつてまたなくなつてそしてその一つがぼかつともつとあらゆる広い世界ががらんとひらけあらゆる歴史がそなはりすつと消えるともうがらんとしたたゞもうそれつきりになつてしまふのを見ました。だんだんそれが早くなつてまもなくすつかりもとのとほりになりました。

(「銀河鉄道の夜」初期形三より)

▼ このような認識は、この世の現実は一切心的仮象であるとする、仏教的な「唯識」の思想にも通じ、賢治の世界観の重要な要素となつていたと思われる

▼ そしてこの世界観に立てば、「自己の心的現象の描写が、即ち世界記述になる」わけであり、これこそが「心象スケッチ」の方法論であつたとも言えよう

▼ 一方で、これはあくまで自己を中心とした一種の「独我論」であり、例えば退学に際してこのような言葉をかけられた保阪嘉内の心が慰められたとは思えない

② 独我論から「重重無尽」へ

▼ この独我論の蝸壺から脱するには、「世界との合一化」を行うのが自分一人だけにとどまらず、皆が一斉に行えばよいということになる

- 各々が世界を包含するとともに、また世界に包含されるという、相互の入れ子構造になる
- これは、インドラ神の宮殿を飾る網の目に付けられた多数の宝珠が、相互に各々を映し合つていくという、華嚴思想の「重重無尽」「一即一切・一切即一」の世界観に通ずる

⇨一つの宝珠の面上には他の全ての宝珠が見え、別の宝珠の面上にもまた同様に全てが見えると
いう存在様式は、『春と修羅』『序』の次の箇所繋がる

(すべてがわたくしの中のみんなであるやうに
みんなのおおのなかのすべてですから)

(『春と修羅』『序』より)

▼ 「農民芸術概論綱要」に掲げられた標語のうちのある部分は、若者たちに向かって、ともにもこのような世界認識へと飛躍することを呼びかけたものではないか

自我の意識は個人から集団社会宇宙と次第に進化する

新たな時代は世界が一の意識になり生物となる方向にある

正しく強く生きるとは銀河系を自らの中に意識してこれに応じて行くことである

まづもろともにかがやく宇宙の微塵となりて無方の空にちらばらう

しかもわれらは各々感じ 各別各異に生きてゐる

われらに要るものは銀河を包む透明な意志 巨きな力と熱である (「農民芸術概論綱要」より)

③ 他者に対する共感性・共振性の高さ

先にちよつとふれた赤シャツ事件は、伊藤賢勇(のち花巻病院事務長)という子が当時珍しかった赤シャツをきて学校へきたので、たちまち「メッカシ、メッカシ」といじめられたことから始まる。ひとりがはやしだすと、大波のように伝播して伊藤をとりまいてさわぎたてた。それを見た賢治はたまらなくなつて、その輪の中へとびこみ、「おれも赤シャツきてくるから。な、いじめるならおれをいじめてくれ」と、なぐさめたり、たのんだりしたのである。〔中略〕

あるとき、いたずら生徒がろうかに立たされ、罰として水をたたえたお茶碗を持たされていた。賢治はそれがかわいそうでならない。いづくあいに先生の用で教員室へいくことになつたので、ろうかへ出るとあつというまにその水をゴクゴクのんでしまい、「ひどいだらう。たいへんだらう」と同情した。〔中略〕

みんなで車屋の前の道路でバツタ(メンコ)をして遊んでいたときのことである。バツタバツタとメンコを叩いているうちに、その一枚がとびはねたのをあわてて追っかけた子がある。そこへ運わるく荷馬車がきた。のびした子どもの手をグザツとわだちがひいた。アツという悲鳴。血がポタポタ流れでる。賢治はむちゅうになつてかけより、「いたかべ、いたかべ」といいながら、その傷ついた血と泥の指をむちゅうで吸っていた。(堀尾青史『年譜 宮澤賢治伝』より)

▼ 賢治の「自我境界の薄さ」は、「自」と「他」の区別を溶かし去り、他人の痛みは自分の痛みと同一のものとして現れる

▼ 次の有名な言葉も、「そうあるべき」という理念を述べたものではなく、賢治にとっては「それ以外にあり得ない」という、切実な現実を吐露したものではないか

世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない (「農民芸術概論綱要」より)

(なぜなら、もしも世界が一つの意識であり生物であるならば、例えばその一つの細胞だけが幸福という状態はありえない)